

最先端が面白く読める

実に見事な本である。いま最先端で活躍する人はどのような発想をするのが良くわかる。本書は読みやすく、そして何よりも面白い。

本書には国際学部付属研究所の公開セミナーにおける一〇回の対談が記録されている。ゲストは論壇、文壇、研究などの分野における超一流の人物であり、原武史氏（国際学部教授）あるいは高橋源一郎氏（同）が対談相手になって議論をしている。特徴が三つある。

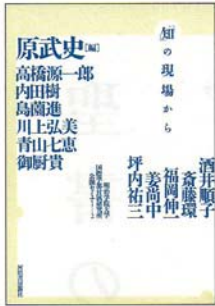
第一に、分野の多様さと先端性だ。皇室、大学、小説作法、鉄道生命、歴史認識、東京など、現代を読み解く様々な切り口が提供されている。そして、それらの分野で最先端の仕事をしている論客の視点、つまり知識や知恵とそれが生まれる「現場」の様子がどのようなものが伝わってくる。

第二に、臨場感にあふれている

ことだ。大教室の壇上における二人の討論の様子が目に浮かんでくる。対談記録といえどもすれば冗長なものが多いが、本書では日常的な話題から高度な学問的内容に至るまで議論がよくかみ合って展開しており、談論風発の趣きがある。

第三に、大学の社会貢献の好例を示していることだ。大学の役割は、研究、教育のほか、最近では社会貢献が言われている。本書は、その点で明治学院大学の姿勢を示すものでもある。これだけ贅沢なゲストを毎回キャンパスに招聘し、しかもその対談を会場無料（事前申込みも不要）で提供しているわけだから、六百人収容の大教室でも立ち見席がでるケースがあったというのもうなずける。

今年秋学期も、同様のプログラムが予定されているので楽しみだ。（国際学部教授 岡部光明）



「知」の現場から

明治学院大学国際学部
付属研究所公開セミナー2
原 武史 編（国際学部教授）
河出書房新社
314頁／1,800円

BOOKS



白金通信 No.458
Shirokane Tsushin

2010年10月1日発行
発行 白金通信編集部
明治学院大学 広報室